

フロンティアスクール中間報告書

都道府県名	新潟県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	佐渡郡新穂村立新穂中学校					
学 年	1 年	2 年	3 年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	2	2	0	5	10
生徒数	33	45	50	0	128	

研究の概要

1. 研究主題

基礎・基本の定着と個に応じた指導
------------------

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

<ul style="list-style-type: none"> <li>・全学年・数学</li> </ul> <p>生徒の学力差が大きい教科であるため。主として今年度2学年の生徒で習熟度別学習を行い、3か年追跡して研究する。</p>
---

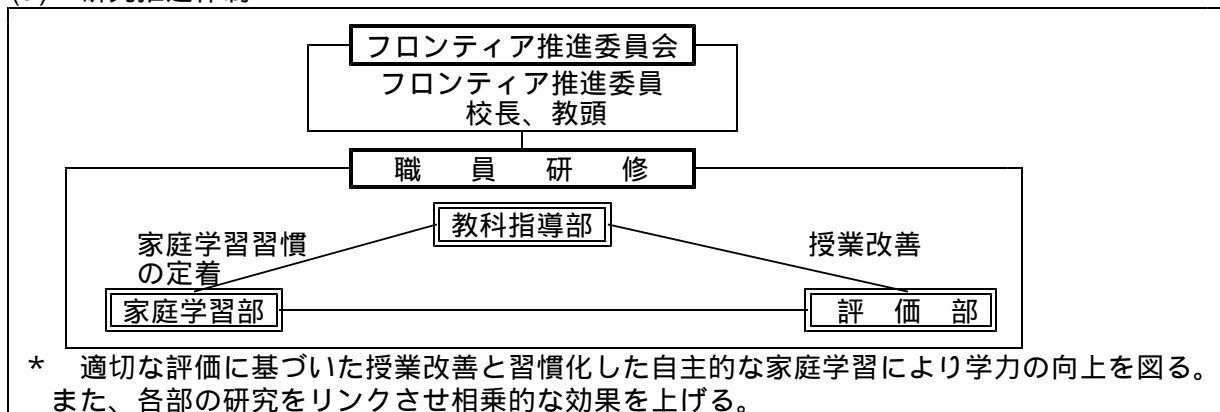
(2) 年次ごとの計画

平成14年	<p>テーマ 基礎・基本の確実な定着。 研究の見通し（仮説） 生徒の学力実態を知り、それに合った指導方法、指導形態を工夫すれば基礎・基本を定着させることができる。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>ア 指導方法の工夫・改善</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ きめ細かな見取りと指導を行うため、TTを行う。</li> <li>・ 個々の進度に応じて学習を深められるよう、1年生で全単元の終末に習熟度別学習を行う。（2、3年生では重点単元により実施）</li> <li>・ スモールステップ方式（基礎コース、発展コース 各8～10段階）で指導する。</li> </ul> <p>イ 教材の工夫・開発</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 段階別課題プリント（基礎コース、発展コース）を作成する。</li> <li>・ 学習すべき基礎・基本を明確にしたプリントを作成する。</li> </ul> <p>ウ 評価方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 習熟度別学習で自己の学習進度が分かるように自己評価カードと確認テストを作成する。それらを用いて学習内容の定着度を判断して指導に生かす。</li> </ul> <p>エ 体制作り</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 職員研修で新しい評価観と評価方法についての研修を深める。</li> <li>・ 定期テストへの補充学習を計画的に実施する。</li> <li>・ 家庭学習マニュアルにより、学び方を身に付けさせる。</li> <li>・ 家庭学習の記録により、生徒の実態を把握し、家庭と連携しながら家庭学習の習慣化のための指導・援助を行う。</li> </ul>
-------	--

平成15年度	<p>テーマ 基礎・基本の定着と個に応じた指導 研究の見通し 生徒一人一人の学力を正しく把握し、指導方法、指導形態を工夫すれば、基礎・基本を定着させることができる。</p> <p>研究の内容・方法 ア 基礎・基本の定着と発展的な学習を進めるための指導方法の工夫・改善を図る。 ・ 数学科を中心として、T Tや習熟度別編成による少人数指導（習熟度別学習）の工夫・改善を図り、補足的な学習や発展的な学習の指導を進める。 イ 個に応じた指導のための教材の工夫・改善を行う。 ・ 数学科の実践から、学習段階に応じた教材の工夫・改善を行う。 ウ 指導と一体化した評価の工夫・改善を図る。 ・ 個人内評価、形成的評価を重視し、自己の変容を感得できる評価を進める。 エ 学力向上のための全校指導体制の在り方を研究する。 ・ 家庭学習・朝学習を習慣化させることにより基礎学力を徹底し、基礎・基本の定着を目指した指導体制を構築する。</p>
--------	---

平成16年度	<p>テーマ 基礎・基本の定着と個に応じた指導の充実 研究の見通し 生徒一人一人の学力を正しく把握し、指導方法、指導形態を工夫すれば、基礎・基本を定着させ、理解を深めることができる。</p> <p>研究の内容・方法 ア 基礎・基本の定着と発展的な学習を進めるための指導方法の工夫・改善を継続する。 ・ 領域、単元に応じた適切な学習形態の工夫・改善を図り、学習指導を進める。 イ 個に応じた指導のため、教材の一層の工夫・改善を行う。 ・ 学習段階に応じた教材を効果的に活用するための工夫・改善を進める。 ウ 指導と一体化した評価の工夫・改善を図る。 ・ 全教科で個人内評価、形成的評価を重視し、自己の変容を感得できる評価を進める。 エ 学力向上のための全校指導体制の在り方を研究する。 ・ 家庭学習・朝学習を習慣化させることにより基礎学力を徹底し、基礎・基本の定着を目指した指導体制の改善を図る。</p>
--------	---

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究の成果

【表1 確認テストの正答率 単位%】

	1章	2章	3章	4章
基礎コース	66.2	52.9	69.3	64.4
発展コース	83.7	83.7	88.1	89.4
全体	73.2	71.3	80.9	78.4

【表2 基礎学力テストの合格率(80点以上) 単位%】

第1回	第2回	第3回
81.8	71.1	91.1

単元の終了時に行っている「確認テスト(A学力問題(基礎学力)、B学力問題(基礎・基本)を含む)」(表1)における全体の正答率は70%以上であり、「基礎学力テスト」(表2)では70%以上の生徒が合格した。

【表3 県中教研学習指導改善調査正答率 単位%】

		基礎学力	基礎・基本	自ら学び自ら考える力
H15年5月(1年内容)		86.6	71.1	46.0
H16年1月 (2年内容)	全体	92.2(5.6p)	79.8(8.7p)	45.3(0.7p)
	基礎コース	82.5	61.0	7.1
	発展コース	96.9	89.0	63.8

「県中教研学習指導改善調査の結果(2年内容)」(表3)の全体の正答率はA学力で90%以上、B学力で約80%の正答率であった。昨年5月の結果(1年内容)と比較してA学力は5.6ポイント、B学力では8.7ポイント上昇した。基礎コースでは、A学力が80%以上の正答率である。発展コースでは、A学力の正答率が95%を超え、B学力の正答率が90%近くになっている。

これらのことから、ほとんどの生徒に基礎学力の徹底と基礎・基本の定着が図れたと考える。コース別に見ると、基礎コースで、ほぼ基礎学力の徹底がなされている。発展コースでは、基礎学力が徹底され、基礎・基本が概ね定着している。

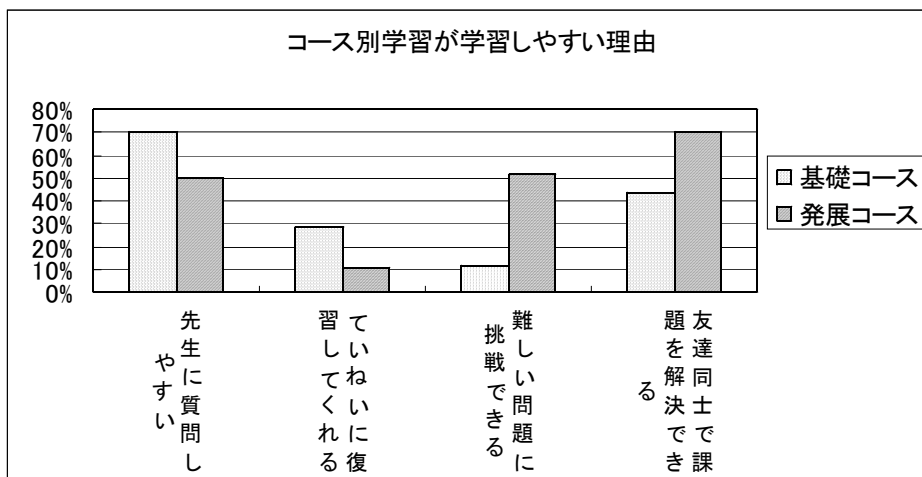
【表4 生徒アンケート「数学がわかるようになったか」の回答 単位%】生徒アンケート

	H14年7月	H15年7月	H16年1月
わかるようになった	24	30	30
どちらかといえばわかるようになった	56	41	58
変わらない		25	12
どちらかといえばわからなくなった	17	2	0
わからなくなった	3	2	0

(表4)から、昨年度に比べ、「わからない」「どちらかといえばわからない」という生徒の割合が減り、「わかる」「どちらかといえばわかる」と答えた生徒の割合が合わせてほぼ90%に増えた。今年度7月と比較しても、「変わらない」と答えている生徒の割合が減り、習熟度別学習により学力が向上していることを生徒も気持ちの上で実感していることがわかる。

【表5 生徒アンケート「コース別学習が学習しやすい理由」の回答

H15年7月、10月、H16年1月の3回平均値】



アンケートによれば、習熟度別学習が90%以上の生徒に支持されている。その理由として(「コース別学習がしやすい理由」表5) 基礎コースでは、「先生に質問しやすい」「ていねいに復習してくれる」が発展コースに比べ高い数値を示している。アンケート結果は、基礎学力の徹底が支援の時間を十分とり、教材を工夫し、小テスト等で繰り返し復習した成果であることを裏付けている。

一方発展コースでは、「難しい問題に挑戦できる」「友人同士で課題を解決できる」と答えた生徒の割合が基礎コースに比べ高い。主体的に取り組むことによって分かるようになったと感じていることを示している。生徒の主体性を重視し、課題解決を行う場面を多く設定したことが基礎・基本の定着に効果があったと考えられる。

評価カードについての生徒アンケートでは、約75%の生徒が(評価カードは)「役に立った」「どちらかといえば役に立った」と答えている。その理由は、「学習内容が書いてあるので予習や復習しやすい」80%、「自己評価することで自分の苦手なところを意識して学習できる」50%となっている。このことから、自己評価カードを使うことによって、生徒は課題を把握し、見通しをもって学習に臨むことができたといえ、この点において有効に機能したといえる。また、評価カードによって適切に一人一人の生徒を見取り、指導に反映できたことが基礎学力の徹底と基礎・基本の定着に貢献したと考えられる。

アンケートで、家庭学習の時間が4月より「かなり増えた」「少しは増えた」という生徒を合わせると、全体で80%を越える。月別平均学習時間(表6)でもわずかながら時間が増えており、家庭学習が習慣化しつつあるといえる。

家庭学習の習慣化、朝学習の取組、基礎学力テストの三つを組織化することで基礎学力徹底の後押しをしており、さらに習慣化の取組を進めていきたい。

【表6 平均学習時間】

	4月平均	4～12月平均
1年生	39分	45分
2年生	25分	38分
3年生	40分	53分

## 2. 今後の課題

「県中教研学習指導改善調査の結果」(表3)からC学力(生きる力)の定着が不十分であり、また、基礎コースのB学力(基礎・基本)の定着も完全とはいえない。

この原因としては、

(1) 基礎コースで基礎学力の徹底に重点を置いて復習に時間をかけたので、基礎・基本の定着のための学習時間が不足した。

(2) 発展コースでは、基礎・基本の学習に時間をかけすぎた結果、発展的な学習の学習時間を十分とれなかった。また、一人一人の生徒の学習段階にあった課題の提示や準備が不十分なところがあった。

これらのことから、基礎コースでは基礎・基本の一層の定着を図り、発展コースでは基礎・基本の理解を深めて、発展的な学習を充実させていく必要がある。評価カードに関するアンケートでは、評価カードが「学習意欲の向上につながる」とした生徒が全体の約50%にすぎなかった。評価カードが次の学習段階の意欲につながるよう全校体制でさらに改善を進める必要がある。

家庭学習の習慣はある程度定着してきたものの、自主的なものにはなっていない現状から、達成感もてるよう課題の内容や家庭学習マニュアルをさらに改善していく。

#### 学力把握のための学校としての取組

- 1 定期的な学力テストの実施
  - ・ 教研式標準学力検査 N R T  
(全学年 国語、社会、数学、理科、英語 H15年4月、H16年1月実施)
  - ・ 県中教研学習指導改善調査  
(全学年 国語 H15年5月実施、数学 H15年5月、H16年1月実施)
- 2 基礎学力テストの実施(全学年 国語、数学、英語 年4回実施)
- 3 学習意識調査 (全学年 年2回実施)
- 4 数学科コース別学習アンケート (2年生 各単元毎に実施)

#### フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- 1 フロンティアスクール中間発表会を次のように実施した。
  - ・ 日 時 平成15年11月25日
  - ・ 会 場 新穂村立新穂中学校
  - ・ テーマ 基礎・基本の定着と個に応じた指導
  - ・ 対 象 佐渡島内小中学校、県内フロンティア事業指定校
  - ・ 内 容 公開授業(数学2年生の習熟度別学習)  
研究協議会  
講演会 「学力形成に及ぼす要因」  
新潟大学教育学部 助教授 柴山 直 様
- 2 村内小学校と連携した授業研究会を次のように実施した。
  - ・ 日 時 平成15年6月30日
  - ・ 会 場 新穂村立新穂中学校
  - ・ テーマ 習熟度別編成による少人数指導における指導法の工夫
  - ・ 対 象 村内小学校、村教育委員会
  - ・ 内 容 公開授業(数学2年生の習熟度別学習)  
研究協議会

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】  15年度からの新規校  14年度からの継続校
- 【学校規模】  3学級以下  4～6学級  
 7～9学級  10～12学級  
 13～15学級  16学級以上
- 【指導体制】  少人数指導  T・Tによる指導  
 その他
- 【研究教科】  国語  社会  数学  理科  
 外国語  音楽  美術  技術・家庭  
 保健体育  その他
- 【指導方法の工夫・改善に関わる加配の有無】  有  無